コメント：イギリス帝国史研究の視点から

水　谷　　智

はじめに

私はイギリス帝国の社会史を専門としておりまして、ミッション高等教育が専門ではありません。インドの混血問題の研究を手がけた折も、ミッションについては、初等・中等教育に関することを扱うのみであり、高等教育を直接的に研究したことはありません。そうした点から、やや今日のコメントには限界があるかと思います。コメントを依頼されてから、にわかにミッション高等教育についての勉強を始めたのですが、Heyden J. A. Bellenoit という研究者が 2007 年に出した *Missionary Education and Empire in late Colonial India* という本に注目しています。もちろんこの本の主張がどのくらい妥当なのか、どういった批判がありうるのか、今の私には判断できない部分があります。それは今後の課題とさせていただき、ここではさしあたり討論の材量として紹介させていたします。コメントの後半部分は、この本に基づいて行っていきます。

小檜山先生のご発表のテーマが「帝国」という問題でした。帝国主義が絶頂を迎えた時代におけるアメリカの伝道とはいかなるものだったのでしょうか。アメリカの帝国主義をイギリスの帝国主義との比較を通じて見ることによって、その特徴が描けるのではないでしょうか。そこで今日は、「イギリス帝国史研究の視点から」ということでコメントさせていただきます。

イギリスの植民地主義の特徴はアメリカとはずいぶん違うのではないでしょうか。アメリカのフィリピン領有についても、将来の独立を約束し、基本的には永

続的な領土支配は行わないことを前面に出していく。「我々はイギリス、フランスとは違う」と、以前の植民地主義を批判しながら、アメリカは自らの植民地主義を正当化していく。アメリカが批判していたのが、他ならぬイギリスの植民地主義でした。

Ⅰ　イギリス帝国におけるミッション高等教育

小檜山先生がとりあげたインドの大学は、アメリカの植民地にあるわけではなく、他国の植民地に建てられた大学です。その場の統治をしているのはアメリカではありません。そこがイギリスのミッション高等教育と違っています。イギリスにとっては、自国の植民地におけるミッション高等教育の話ですから、後に現地の人々との衝突、ネイティヴ権力との関係性が大きく出てくるということになります。そこで、ミッション・スクールは果たして単に帝国に協力した手先だったのか、それとも全く帝国に関心なく、純粋に宗教的なことにしか興味がなかったのか、あるいは植民地主義に批判的だったのか、そのあたりを少し考えてみたいと思います。

近年の研究として先述したBellenoitのものがありますが、彼のアプローチは非常に新鮮です。最近は､エドワード･サイードによるオリエンタリズム論にのっとって、伝道が差異の構築に大きな役割を果たしたという議論が多いのですが、彼はミッション教育の現場に着目し、現場の教師がネイティヴの権力、学生とどうインタラクトしていったかということを研究しています。

イギリス帝国全体をみておきますと、19世紀後半から20世紀にどんどん学校ができていきました。地域的に早かったのはインドですが、その後、英領アフリカ、南アフリカ、ナイジェリア、ウガンダ、ケニア、そして東南アジアにもできていきます。中東は直轄領というよりは、オスマン帝国の領土をイギリスが少しずつ奪うことで、植民地化されていきますが、そこにも宣教師が入っていきます。

現地の人々、ネイティヴの需要があったことが重要だと思います。必ずしもキリスト教の教義を学びたいということではなく、英語で行われる高等教育に対する需要があったということです。それを反映してミッション・スクールに学生が来て、ネイティヴの篤志家からの寄付金も集まります。ただし彼らが求めているものはキリスト教教育とは限らないので、妥協することが必要になってきます。教育の内容自体は世俗的なものになり、宗教的な寛容性が求められます。イスラム、ヒンドゥーを頭ごなしに否定して、「それらは劣っている、キリスト教が優位である」といってしまうと、たちまち混乱が起こる状況があったといえます。現地学生の主体性も一つの特徴であろうと思います。一方的にキリスト教の教義を押しつけたとしても学生の解釈は異なってきます。たとえばキリスト教の教えを自分の宗教であるヒンドゥーに引きつけて理解する可能性もあったのではないでしょうか。

もう一つ重要なポイントとして、ミッション・スクールがどうして盛んになったのかということがあります。もともと高等教育は植民地政府が行うものでした。しかしそれが、たとえばベンガルにおいて失敗とみなされ、その代替としてミッションが出てきたということだと思います。そこでまず、官学として始まった「英語教育」の歴史を概観しておきましょう。

Ⅱ　英領インドにおける歴史的展開

1　英領インドの「英語教育」の起源

「英語教育」の起源を理解するには、統治の問題をみておく必要があります。英語による高等教育が最も盛んだったのがベンガルですが、そこは非常に人口が多いところで、19 世紀初頭、2,000 万人くらいの現地人が存在し、そこを 200 人くらいの東インド会社の社員が治める、統治の難しいところでした。そういう状況にあるので、現地のエリートを活用せざるを得ません。200 人で 2,000 万人を

治めるのは不可能ですが、だからといって本国からエリートの官僚を何千人もつれてくると、給料が高く設定されていますので、たちまち財政がパンクします。効率性の問題が大きく絡み、英語による高等教育の必要が出てくるのです。イギリス人の官僚が現地の言葉を学ぶより、現地のエリートが英語を学ぶ方が効率がよいということで、「英語教育」（English education）が始まっていきます。植民地政府が始めた、官僚を安上がりに養成するという制度であり、政府が直接経営するカレッジ（college）が中心になっていきます。

インドの初期の大学はロンドン大学をモデルにしています。「ユニバーシティ」は概念上のもので、カレッジがたくさんあり、その集合体がユニバーシティだという形です。そしてカレッジの中にも序列があります。カルカット大学には、「ヒンドゥー・カレッジ」と呼ばれるカレッジがありましたが、これが最もエリート的なもので、日本でいえば東大法学部のような存在でした。

一方、ミッションのカレッジもありました。しかし、これらはカレッジとして認められてはいますが、ヒエラルキーの中では、かなり下の方に位置づけられていて、周辺的な存在でしかありませんでした。そしてそうしたカレッジで教えているミッションの人たちには、不満がたまっていました。主な理由は以下の通りです。政府系のカレッジは世俗教育を重視しました。イギリスがインド統治を行う際、宗教に対して慎重な姿勢をとったからです。インドはヒンドゥー、イスラムの２大宗教があるところで、そこにキリスト教をあからさまにもってくると現地のエリートの心情を刺激するだろうという考え方であり、教育は基本的に世俗的なものが要求されたというわけです。しかしミッション系のカレッジの人々は、もっと「心の問題」を重視すべきだと主張し、それが認められないことで不満がたまっていったのです。その結果、ミッション・スクールは官学の「英語教育」批判の先頭に立っていくことになりますが、ここで歴史的な変化が起きます。

2　官学批判とミッション・スクールの需要

それは、1870年代から徐々に、英語で高等教育を受けた現地の人々が民族主義化していくという問題です。これにはさまざまな理由がありますが、重要なものとして、政府は官僚養成するために大学を始めたが、それに見合う十分なポストの数を用意していなかったという高学歴失業問題があります。大学教育は受けたが、それを活かす職が全くない。スキル、知識のレベルは高いが、ホワイトカラーの仕事にありつけない。今更、肉体労働につくわけにもいかない。そうした不満が高まって、経済的に不安定な状況におかれた若者が大量に出てきます。こうした中で、政府自身、このまま英語教育を続けていくとどんどんナショナリズムが高まっていくのではないかということで、1890年代半ば以降、高等教育の直接経営から手をひき、民間の努力に資金を分配していく方向に転換していくことになります。

こうしたなか、官学の英語教育に反対する運動の先頭を走ったのがミッションの人々でした。彼らは植民地政府とは見方が違っていて、「どうして学生が民族主義化するか」という問いについて、教育政策が全く宗教的なものを軽視しているからだと理解します。イギリスの歴史、文学、法律、科学など、世俗的で合理主義的なものばかり教えるから、彼らは自分の利益を追求して不満を高め、最終的にイギリス支配に反抗的な若者が増える、という主張をしていくわけです。1880年代以降、民間の学校が重要になってくると、もともと英語による高等教育を手がけていたミッションによる学校の人気が出てくることになります。

ミッション高等教育の実像について、Bellenoitの研究を紹介したいと思います。Bellenoitによれば、今までのミッション高等教育に対するまなざしはバランスを欠いていました。従来の研究は、ミッション教育を批判するような現地の学校に焦点をあわせて、反西洋的な、反ミッションの教育が民族主義の時代に高まっていったと強調してきました。しかしそれに対してBellenoitは、そうしたなかにおいても、実際の現地の人々の需要、人気という点では、ミッション教育

は実は一定の支持を得ていたとします。普通のヒンドゥー家庭の親が娘に教育を与える時にもミッション教育は人気があったということが小檜山先生のお話にもありましたが、このことをどう説明するかということです。ミッション教育は帝国の手先にすぎないという見方に対して、Bellenoit はミッションの高等教育の現場の教師は、民族教育に同情的だったことを実証します。

3　ミッション高等教育の実情

イデオロギーとしての「文明化の使命」と人種的差異について考えてみましょう。小檜山先生がアメリカの事例についてもおっしゃいましたが、宣教師は本国のキリスト教徒の支援を得なければなりません。その時にどうするかというと、「海外の非キリスト教徒の人々はこんなにかわいそうなのですよ」、と主張します。インドなどは全然文明化されておらず、女性は男性に虐げられていて、教養もない、と。そういうところを、伝道によって「文明化」していくのが宣教師の歴史的役割だ、と。そのために人種的差異があえて強調されるところがあるわけで、キリスト教伝道が帝国主義を補完するものであったといわれるゆえんですが、ある程度、それは普遍的にいえることだと思います。

しかし現場で実際に非キリスト教の学生と相対する教員たちは、全く違う振る舞いをすることがありました。ひとつには、学生たちは宗教的なものも求めているかもしれないが、必ずしもそれがキリスト教とは限らなかったということがあります。また、彼らは英語による近代的な教育を求め、ミッションが本当にやりたいことと現地の需要とにはずれが生じます。そういう中で、インドの場合、宗教教育に関していうと、ハイブリッド的、対話的なアプローチがとられたのではないかと、Bellenoit はいろいろな事例を紹介しながら主張しています。

さらに Bellenoit はインド人の主体性も強調します。宣教師側が一生懸命キリスト教について教えても、学生の側は自分の好きなように解釈していきます。たとえば Bellenoit が紹介しているのは、キリストとクリシュナ（ヒンドゥー教

の神の一人）の類似性を学生が勝手に想像し、普遍的な宗教的理解にいたろうとしている事例です。そうした多宗教、ハイブリッド的なアプローチに加えてBellenoitが強調するのが、民族主義への寛容性です。政府は、もともと英語による高等教育は危なく、そこから手を引くという立場です。そして残ったミッションの学校も潜在的に危険とみなしてマークします。これに対し、現場のミッションの教員たちは、政府の追及の手から学生たちを守ろうとふるまいます。

では現地の学生の愛国心に同情的な立場とは何なのでしょうか。宣教師が根本的に反帝国主義的だとか、反イギリス的だったということをBellenoitは主張しているわけではありません。彼らが自国の政策を本質的に批判したのかというと、またそれは違うだろうということになります。彼らは攻撃的な反外国主義、反英主義は支援しませんでした。ただ常に学生と触れ合う中で、彼らの民族主義への目覚めも理解し、それに同情していったのです。おそらく現場のミッションの人々は、自分たちにとって大事なことは、今の状況の中でいかに影響力を保持するか、そしてそれを将来いかに持続させていくか、ということでした。20世紀初頭におけるインドは、独立に向かっていきます。その中で、反民族主義ではなく、インドの愛国心に同情的なスタンスをとっていったのが宣教師です。ただその動機をどう考えるかという点が重要です。必ずしも反英的ではなく、ミッショナリーとしての自分の立場をいかに保持するかという、ある意味、自己中心的な動機に基づいていたのではないかというのがBellenoitの主張です。もちろん宣教師のなかにも帝国主義者は多数存在したわけで、Bellenoitの見解には批判もあるかもしれません。しかし彼の研究の意義は、分析の対象を政府やイデオロギーからミッション高等教育の現場にシフトさせたことにあるのではないでしょうか。

おわりに

以上が大雑把な、インドにおけるミッション高等教育の概観ですが、小檜山先

生の発表とこれを、どうリンクさせていけばよいでしょうか。ひとつには、領土を支配することを前提にしたイギリス帝国は、アメリカと大きく異なっているという点があります。そういう違いの中におけるアメリカのミッションの特徴について、小檜山先生がどのようにお考えかをお伺いしたいです。

もう一点は、アメリカは基本的には領土支配帝国ではないが、海外にいくつか領土をもっていたということも事実だという点です。ハワイは植民地ではなく、完全に州として併合されていきますが、問題はフィリピンです。フィリピンはカトリックの国で、アメリカとは全く違うと当時認識されました。アメリカはフィリピンに大学を建てるプランがあったのか、もしあったとすれば女子大学のスキームと何かリンクしていたのか、初歩的な質問になりますが、ご教示いただければと存じます。

私の方からは以上です。